

日本語母語話者の日本語コミュニケーションの実態

—母語場面と接触場面の比較も交えて—

宇佐美 まゆみ (東京外国語大学)

E-mail: usamima@tufs.ac.jp

1. この発表の主張

海外で日本語を教える際の難しさの一つに、「自然なコミュニケーションの仕方」をなかなか伝えられないということがある。最近、海外でも日本のアニメやドラマが手に入りやすくなったが、それらの中の「会話」や「やりとり」も、実は、シナリオがない「自然会話」と比べると、かなり異なっていることがわかる。適切なあいづちの打ち方や、共同発話のタイミングなど、日本語の自然会話のやりとりの特徴には、単純に「教える」ことが難しい現象が多い。「日本語教育のためのコミュニケーション研究」の成果を生かした日本語教育を行うには、従来のように、文法や文型を中心にした捉え方の発想を転換し、日本語のコミュニケーションを、日本語を用いた「対人コミュニケーション」として捉え直す必要がある。その際、重要な点は、「聞き手としての反応の仕方」に、もっと注意を向けることである。今後、自然会話研究の結果を踏まえ、学習者の真のコミュニケーション能力を養成するためには、まずは、副教材としての「自然会話教材」の開発が必須であることを主張する。

2. これまでの研究から明らかになってきていること—母語話者の言語行動の特徴—

上記のような観点から、日本語母語話者の実際の会話データに基づいて、日本語コミュニケーションの実態を分析した一連の研究から、以下のようなことがわかってきている。(宇佐美、2001、2008、2009)

- (1) 文型的には、さほど、複雑なものが多用されているとはいえない。
- (2) 相手への配慮や、社会的な上下関係をことばによって明示的に表すのを避けるため、その他の理由から、文の後半を明確に述べない「中途終了型発話」がよく用いられる。
- (3) 聞き手の側は、理解や共感を示したり、会話のテンポをあわせて盛り上げるためなどに、省略されている部分を推測し、相手が文を完結する前に、文の後半部を述べる「共同発話文」などを用いて、話し手の意図を理解しているということを、常に積極的に相手に伝える努力をしている。

これらの結果が、日本語教育に示唆することは、以下の通りである。

- (4) 聞き手の側の反応の仕方は、文法的には難しいとはいえないが、相手の発話の意図を即座に理解し、それに適した反応をする必要があるという意味で、高度な能力を必要とする。つまり、「コミュニケーション能力」とは、文法的に正しい文や複雑な文を一人で作ることができるということではなく、実際のやりとりの中で、まずは、「自分の意図を正確に相手に伝えることができる能力」を基盤とするものの、それに加えて、「相手の発話の意図を理解する能力」と、「理解していることを、適切に相手に伝える能力」、さらには、「相手が言わんとすることを予測する能力」と、「そのことを適切なタイミングで相手に伝える能力」から構成されると考えることができる。
- (5) これまでの日本語コミュニケーション教育では、「いかに話すか」に焦点が当てられてきたが、「相手の発話をいかに聞き、それにいかに反応するか」についての教育にも、もっと力を入れる必要がある。

今後、これらの研究結果を踏まえ、学習者の真の「日本語コミュニケーション能力」を養成するためには、副教材としての自然会話教材の開発が必須である。

3. 母語話者は、母語場面ではいかなるやりとりをしているのか

以下には、実際の自然会話データの中のやりとりのいくつかを例として示す。〈 〉(〈)と〈 〉(〉)は、後者が前者にオーバーラップしたことを表す(宇佐美(2007)を参照のこと)。[は、共同発話文、下線は、着目すべき箇所を表す。(6)は、話のポイントを理解していることを相手に伝える共同発話文の例、(7)は、あいづち的発話のバリエーションの例。

- (6) 事務職は、教師とは違って、産休・育児休暇がとりにくいという話題の中で

A: うちは、先生方は、あの、購読が、あの、なくなるだけで、他の(ええ、ええ)非常勤とか、そういう方が(ええ、ええ)やって下さるから(ええ)いいんですけど、あの、そう、事務系とかそういうところは、(そう) 本当にそのまま、

B: 穴があいてしまいますからね。 〈 〉 (中略)

A: で、それをやって、それから、あの一、休みに入ってから(ええ) 一週間に一回ぐらいは、

B: 出て。 (中略)

A: 組織がぼーと(ふーん)改正されたんで、今のところは、あたしの穴って言うのが、

B: ええ、くないんですね。 〈 〉

- (7) 子供の保育園の話から派生して(下線部は、あいづち、共同発話文の例)

- A: なんか、今日は、ちょっと聞いた話によると、都民の日で、
 B: あつ、そうですね。 ←同意型あいづち
 A: で、なんか、幼稚園だとか小学校だとかがお休みだっていうんですけど、
 B: <ああ、そうですか。> <く> ←確認型あいづち
 A: <そうなんですか?> <は>
 B: いや、
 A: <そんなくことはない?> <く> ←共同発話型確認
 B: <保育園は> <は> お休みじゃくないです。> <く> <笑い>
 A: <あ、ないですか、> <は> あーあ。 ←共同発話型確認

4. 母語話者は、接触場面ではいかなるやりとりをしているのか

母語話者(NS)が非母語話者(NNS)と話す際には、フォリナー・トークが用いられることがあるが、共同発話に関しては、助け舟を出すような形のものが増える。以下の例では、学習者は、母語話者の反応によって、スムーズに言えなかったことが言えるようになっていく。自然会話の中で、学習者の自律学習が促進されたと思われることができるだろう。

- (8) NNS: 韓国で、韓国の女の人は、人の服は(うん)、うーん、んー、色があま
り…たくさん…あまりたくさん…、
 NS: ないく>?。 ←共同発話型確認
 NNS: <あり>、うん、ありますが、ありませんが、 ←自律学習
 (9) NNS: ほんこん、香港の高校生は、そん、そんなに、えー、服を着たら、え
ー、先生は、え、先生、先生をしか…くしか、> <く>
 NS: <先生> <は> にしかられますか。 ←修復型確認
 NNS: うん、しかられます。 ←自律学習

これらの例から、母語話者は、教室場面のような「指導」や「訂正」はしなくとも、自然会話の中で、より自然な形で学習者の自律学習を促進していることがわかる。このような、母語話者の「反応の仕方」とそれに対する非母語話者の反応に着目することによって、非母語話者への日本語コミュニケーション教育で扱うべき点のヒントを得ることができる。

5. なぜ自然会話教材が必要なのか—結論—

オーバーラップやあいづちなどの音声的重なりや、「えー、うーん、あー」などのフィルラーが多いやりとりは、実は、ドラマなどにもあまり見られない自然会話に顕著な特徴である。シナリオに基づくドラマは、一見自然に見えるが、自然会話と比較すると、オーバーラップがほとんどない、全く無駄のないやりとりになっていることがよくわかる。ただ、一見無駄

にも思えるようなあいづちやフィルラーが、会話を円滑、且つ、自然にしているものであり、また、それが、「日本語母語話者の日本語コミュニケーションの実態」に他ならないのである。

ただ、非母語話者でも超絶話者は、ここで取り上げたような「聞き手としての反応」が母語話者とほぼ同じようにできていることが報告されている(宇佐美, 2009)。このことから、通常の教科書では扱われていない、以上に例示したような反応の仕方は、学習者個人個人が、母語話者との自然なやりとりの経験を数多く経ることによって、意識的・無意識的に身につけていったと推測できる。ただ、これからの日本語教育では、「これらの実践的なコミュニケーション・ストラテジーについては、教室の外で、勝手に学習してください」とじてすますことは許されないだろう。自然会話データに基づく談話研究の成果が蓄積されつつある今日、それらを活用して、日本語コミュニケーション教育を効率化・充実化していくことは、日本語教育の主要な課題の一つだからだ。

その一つの方法として、シナリオがなく、話者の発話を自然にまかせているという意味での「自然会話」の録画場面とその文字化資料を素材とし、その中の着目すべきストラテジーなどに解説をつけた「自然会話教材」を作成するということがある。主に独習用として、学習者がWeb上で、自由に、自分のペースで、自分の好きなシーンから、利用できるようにすることによって、実際の日本語コミュニケーションの疑似体験が効率的にできるようになり、学習者の自律学習が促進されるということが期待できる。学習者が必要としているにもかかわらず、教師側が気づいていない要素に、学習者自身が気づく可能性もあるからである。

引用文献

- 宇佐美まゆみ (2001) 「21世紀の社会と日本語—ポライトネスのゆくえを中心に—」『言語』30-1, pp. 20-28, 大修館書店。
 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2007年3月31日改訂版」(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf>)
 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」, 西原鈴子・西郡仁朗(編)『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』pp. 150-181, ひつじ書房。
 宇佐美まゆみ (2009) 「『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロフィシエンシー」, 鎌田修・山内博之・堤良一(編)『プロフィシエンシーと日本語教育』pp. 33-67, ひつじ書房。
 * 「基本的な文字化の原則(BTSJ)」によって記載された「話し言葉コーパス」(2種類)と、自然会話教材(試作版)は、以下のURLから申請書を提出することによって、無料でダウンロードできる。
 話し言葉コーパス <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/corpora2007.htm>
 話し言葉コーパスと自然会話教材(試作版)
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/kaken2007corpora.htm>